フォーカスグループインタビューによる教学IRの実践

The Practice of Institutional Research based on Focus Group Interview

大学教育再生加速プログラム

上畠洋佑（金沢大学）
杉森公一（金沢大学）
河内真美（金沢大学）
北島大器（ﾗｰﾆﾝｸﾞ・ｲﾆｼｱﾃｨﾌﾞ、非会員）

研究の背景

■背景

金沢大学では、大学教育再生加速プログラム事業（以下「AP事業」）において、学生の客観的評価の一層の精緻化を目的とした教学システム内の履修・成績情報等を分析する教学IRを実施する前提として、学生の実態を把握するために質問紙調査の実施を事業計画に含めている。

質問紙の作成にあたり、人間社会学域と理工学域から抽出した187名の学生を対象に、フォーカスグループインタビュー（以下「FGI」）を実施した。

先行研究

川那部ほか（2013）
　学生実態調査の量的分析と、学生へのインタビューによって成長過程を探索する等の質的分析を組み合わせた手法を教学IRに取り入れた。
　質問紙調査を用いた量的アプローチでは、調査者が想定していない要因について測定できない限界を指摘している。

　本学AP事業では質的アプローチにより学生の生の声を聞くことを通して、学生の実態を把握する上でより有効性の高い質問紙の作成が可能になるのではないかと考えた。

上畠ほか（2015）
　学生へのインタビューにより、教学IRを行う前にリサーチ・クエスチョン（問い）を導出した実践事例を報告している。

研究の目的

■目的

　FGIの結果と、その結果を元に作成した質問紙と、その作成のプロセス及び作成した質問紙を用いた量的調査の実施状況について考察することにより、FGI実践の意義を明らかにすることを試みる。

研究方法

■研究方法

FGI実践の意義を以下の2つの点についての考察から明らかにする。

①FGIの結果とその学内へのフィードバック

②FGIの結果を元に作成した質問紙とその作成プロセス及び作成した質問紙を用いた量的調査の実施状況

用語

■用語

教学IR

学生に係る学内のデータを収集し、分析することを「教学IR」と定義する。

リサーチ・クエスチョン（RQ）

「教学IR」で明らかにしたい問いを「RQ」と定義する。

フォーカスグループインタビュー（FGI）

あるグループの人々を集めて、特定のトピックについての議論を促しながら行うインタビュー手法。

FGIとは①

■FGIの特徴

人の意見や態度が、集団の中で形成される過程を把握することを重視しており、個別インタビューよりも、人の日常生活の文脈に即している。また、安心・安全な環境の中で、日常の文脈でインタビュィーが自らの現状を語ることが可能となる。

□FGIを選んだ理由

「関係者の『なまの声』を体系的に整理する」、「関心テーマの背景にある潜在的・顕在的な情報を把握する」、「質的なアプローチを用いて、さらなる研究のための仮説を立てる」ことを目的とする場合に有効であるとされているため（安梅，2010）。

FGIとは②

■FGIの設計

・グループのサイズ
　１グループにつき、４～５人前後で実施

・所要時間
　１回（スロット）あたり45分を基準で実施
　　少人数であるほど短時間で終了する傾向がある。

FGIの概要①

■FGIの目的

　金沢大学の人間社会学域及び理工学域に所属する学生課程学生対象に学類・学年別学生の生活環境及び学修環境の現状、学修動機・認識・行動の促進要因と阻害要因等について明らかにすることを目的とした。

上記の学生の実態把握の目的とともに、FGIで明らかにした結果に基づいて、質問紙を作成することも視野に入れて実施している。

FGIの概要②

調査時期：2015年12月、2016年1月（9日間）

対象者：人間社会・理工学域全学類から各学年5名を抽出

実施対象者：187名（約78%）　内訳は下表の通り

学域	学類	合計				合計
		1年	2年	3年	4年	
人間社会学域	6学類	4	5	5	4	18
		4	1	3	1	9
		2	3	2	4	11
		2	3	2	5	12
		5	3	7	3	18
		4	4	3	3	14
理工学域	6学類	5	5	3	5	18
		5	4	5	5	19
		5	5	5	5	20
		3	4	5	5	17
		4	5	4	5	18
		4	3	2	4	13
合計		187				

FGIの概要③

■分析方法

　FGIの実施と分析は、株式会社ラーニング・イニシアティブと本発表登壇者が共同で行った。

　音声記録から逐語録を作成し、複数人で逐語録から重要だと考えられる言葉を抽出した。

　抽出した重要な言葉は、KJ法を用いて学類・学年毎にカテゴリー化し、各学類学生の実態を表す特徴を文書化し報告書としてまとめた。

FGIの概要④

■FGIの実際の様子

学生がリラックスできる雰囲気作りを重要としている。

FGIの結果①

FGIを踏まえて、各学類学生の実態を表す特徴を記載した「平成27年度能動的な学習環境整備のための学生の現状把握に係るFGI 調査報告書」として文書化しまとめた。

■FGIで明らかになった学生の特徴

（1）入学前の進学動機が個々人の意識や自律的学習に影響
（2）入学後の噂や身近な情報に偏重した履修・コース選択
（3）4年次に至るまでの学問に対する興味醸成機会の欠如

FGIの結果②

（1）入学前の進学動機が個々人の意識や自律的学習に影響

中高時代に、興味関心を抱いた科目や学問分野は、
大学進学後も興味関心を維持し、授業で教わった内容を
深く理解しようと自律的学習を行う傾向がある。

入試時に得意だった科目は、得意という意識が持続せず
大学レベルでは困難を感じてしまう傾向がある。

FGIの結果③

（2）入学後の噂や身近な情報に偏重した履修・コース選択

シラバス、履修ガイド等を十分に理解できない。

友人やサークル・部活の先輩を介したネットワークによる情報により履修科目、コース、研究室、ゼミ選択を行っている。

教職員とのコミュニケーション機会を有さない学生が多い。

FGIの結果④

（3）4年次に至るまでの学問に対する興味醸成機会の欠如

4年次：教員との良好な関係性と研究への興味関心

1～3年次：関係性を築き興味関心を抱くきっかけが乏しい

4年生は、自身の研究について誇らしく語ることが
できるだけでなく、ゼミ・卒業研究を始めることにより、
これまでのカリキュラムや授業内容の重要性に気付く。

FGIの結果⑤

■FGI結果の学内へのフィードバック

・AP実務委員からFD活動のための資料として利用することの希望を受けた。これを受け、AP実務委員会決議を経て、人間社会・理工学域に報告書を提供した。

・理工学域「第８回FDシンポジウム」において、FGI結果報告の依頼を受け本発表登壇者が報告を行った。

・FGI報告書を見た理事が、FGIの有用性を認識し、FGI報告書を医薬保健学域に提供するよう検討している。

FGIを通して作成した質問紙①

■質問紙作成と量的調査の実施検討プロセス

質問紙作成は、本発表の共同研究者４名で行った。

FGI結果を踏まえて作成した質問紙（初案）

・記名式（学籍番号）　・A4両面２枚

・選択式設問は58問、自由記述は2問

→既存調査項目との重複や調査実施者と学生の負担を勘案し、FGIの逐語録と報告書に依拠し質問紙を再設計した。「調査疲れ」（沖，2015）の回避。

調査者の期待と量的調査の実現性の両立

FGIを通して作成した質問紙②

■再設計した質問紙の項目

・入学前の学類選択、学びの期待、就職に関する質問
・入学後の履修登録科目の選択に関する質問
・コース選択に関する質問
・研究室・ゼミ選択に関する質問
・在学中の学びに関する質問
・アドバイス教員制度に関する質問
・学生の学内ネットワークに関する質問

※実際の質問紙は末尾資料を参照願います。

FGIを通して作成した質問紙③

■質問紙（最終版）の概要

・記名式（学籍番号）　・A4両面１枚

・選択式設問（5件法）は28問、自由記述は4問

・回答想定時間は15分（選択式、自由記述含む）

□質問紙（最終版）で実施した量的調査の実施状況

日時：平成27年度学位記伝達式（2016年3月22日）

対象：全学士課程卒業生（悉皆調査）

回収率：79％（1400名／1772名）

考察①

①FGIの結果とその学内へのフィードバック
→気づきや訴求効果としてのFGI実践の意義が考えられた。

本学AP事業における学生・学習支援体制改善について検討するきっかけとなった。
例：シラバス、履修ガイド等を十分に理解できない。
例：友人やサークル・部活の先輩を介したネットワークによる情報により履修科目、コース、研究室、ゼミ選択を行っている。

理事やAP実務委員によるFGI実践の有用性の認識から学内へのフィードバックが行われた。

考察②

②FGIの結果を元に作成した質問紙とその作成プロセス
　及び作成した質問紙を用いた量的調査の実施状況
→より良い質問紙作成と量的調査実施に貢献できた
　FGI実践の意義が考えられた。

FGIの逐語録と報告書に頼りながら学生実態を把握する上でより有効性が期待できる質問紙作成と、高い回収率と「調査疲れ」を回避した量的調査実施の両立を実現することができた。

実施した卒業生への量的調査の素集計から、FGI報告書の根拠となる結果が出てきている。

考察③

■FGIを実施したIR担当者（本発表登壇者）の意識変容

①教学IRにおける量的・質的調査の併用の重要性
→量・質の二分法ではなく適切な調査デザインの検討

②比喩として「データの体温」の重要性
→無機質なものとして学生データを見るのではなく、
データ元の学生を意識して教学IRに取り組む重要性

③学生と対面でコミュニケーションすることの必要性
→学生との対話を通したRQの形成

今後の課題

■今後の課題

・FGIを通して作成した質問紙を用いた量的調査結果の詳細な分析を行う。

・FGI実践の振り返りを行い、FGIで明らかになったこと、明らかにならなかったこと、FGIの良い点や限界について検討を行う。

・FGI結果の学内フィードバックによる各部局への波及効果、教育改善等の確認を行う。

参考文献

安梅勅江編著（2010）『ヒューマン・サービスにおけるグループインタビュー法Ⅲ／論文作成編　科学的根拠に基づく質的研究法の展開』 医歯薬出版

上畠洋佑ほか（2015）「学生インタビュー調査を始点とするIR活動について」大学教育学会2015年度課題研究集会ポスターセッション

沖清豪（2015）「大規模私立大学の事例―早稲田大学 大学総合研究センターにおける取組と課題―」 日本高等教育学会第18回大会IRワークショップ

川那部隆司ほか（2013）「教学IR における学生調査の手法開発―量的アプローチと質的アプローチを併用した学業成績変化過程の検討―」『立命館高等教育研究』 第13 号、pp.61−74

鳥居朋子（2015）「立命館大学における教学IRの開発の現状と展望― IR プロジェクトの歩みとリサーチ・クエスチョンを通して―」『立命館高等教育研究』 第15号、pp.37−53